

本号のテーマ：「コロナ禍における教育現場」

長い休校期間、そして遅れて始まった新学期。学校においても感染予防対策の新しい生活様式に少しずつ慣れてきたかと思えば、もう秋？という私の率直な感想です。いつものことをいつものようにできず、季節を感じる余裕もなく、あっという間に時間が過ぎ去ったような気がします。

春からのほとんどの学校行事は、短縮または中止。学校現場では戸惑いや混乱もありますが、先生方は様々な工夫をしながら学びを進めることと感染防止の両輪を回して進めていく努力をされています。

しかしながら、子どもたち一人一人への配慮に加え、ICT教育、コロナウイルス感染予防の消毒や健康チェックなど、先生の仕事量はどんどん増え、「働き方改革」は何処へいったのやら・・・学校現場は本当に疲弊しているのではないかと心配しています。先生の心の余裕がなくなれば、子どもたちの変化にも気が付かなくなります。ピリピリした雰囲気を出していれば、子どもはすぐに察知して話づらくなります。

8/22 付の信濃毎日新聞には「教え子の話 聞けない 33%」という記事が掲載されています。先生が疲労やストレスを感じたとき「子どもの話をしっかり聞けない」「必要以上に子どもを叱ってしまう」「いい加減な授業をしてしまう」など回答。学校現場の悲痛な叫びだと感じています。

家庭でも同じ現象が起こっています。旅行に行くのも外食するのも人の目が気になる、罪悪感を感じてしまう、もしもコロナにかかったら誹謗中傷を浴びるのではないかと・・・そんな不安とストレスが、子どもたちに良い影響を与えるとは思えません。身近にも保護者の職業によっては「お友だちと遊んじゃいけない」というご家庭もあり、子どもたちの中でも不穏な空気が漂っていました。登校中暑いときはマスクつけなくていいって言うけど、休み時間や遊ぶときはどうなの？部活は？何が良くて悪いのか、正解はないにしても他人がどう見るかも気になってしまい、多かれ少なかれストレスを感じているのではないかと思います。



このような状況下での教育委員会の役割は、できる限りスピーディーな人員の補充、家庭への丁寧な説明や誹謗中傷などの人権教育などを学校が行うための支援です。市でできる範囲の必要な場所への人員の補充は、積極的に対応してほしいと思います。

学校や家庭の不安が少なくなれば、コロナ禍における子どもたちへの悪い影響もなくなっていくと思います。

新型コロナウイルス感染症は、学校教育の現場にも様々な影響を及ぼしましたが、悪いものばかりでもありませんでした。

例えば、分散登校だったからこそ不登校だった子が来れるようになったという話がありました。楽しく学校に通う子が増えることは何より嬉しいことですし、詰め込み授業や家庭学習のあり方、子どもたちへの関わり方など、今一度考えなおす良い機会になったのではないかと思います。ICT教育もこれからますます進んでいくと思われませんが、先生方の中でもオンライン上での会議や、「オンライン授業にトライしてみました」という前向きな学校もありました。実際うまくいかなかったとしても、進むべき道は見たのではないかと思います。また学校現場において、自分たちで考え、良いと思ったことを即実践してみることはとても素晴らしいことです。



他にも、こんなときだからこそ地域や保護者の方に協力をさせていただき、良い関係が築けたという話もありました。行事や会議、研修など今まで「前例通り」に行ってきたことを本

当に必要かどうかを考える、また「前例にない」ものを自分たちの持ち場で考えて作り上げる、そんな良い機会になっていけばいいのではないかと思います。まさに「ピンチをチャンスに」ですね。これからは、家庭教育×学校教育×地域社会教育が繋がりをもって一人一人の子どもを地域社会で育てていく時代です。

「不登校予備軍のフォロー」

長い休みのあとは不登校になる子どもも多く、全国の不登校生徒は小中合わせて14万人以上いるそうです。

もし自分の子が「学校に行きたくない」と言い出したら…親は悩みますよね。

私も悩んだことがあります。どうしたらいいのかわからなくて、友人に相談したりネットで検索したりしました。

「何がなんでも学校には行くもんだ！」と考えている大人は思ったより多いと思います。それを知っているから子どもは「学校に行きたくない」とはなかなか言えません。子どもによっていろんな原因があるとは思いますが「爆発寸前のSOS」だと思って、子どもの苦しい気持ちに寄り添ってあげてほしいと思います。

私は「学校に行きたくなくなったら行かなくてもいい」と諸手を挙げて賛成！というわけではありません。家庭内で子どもに関わる大人は親と数人しかいませんが、学校

は大人も子どもも年上も年下もいっぱいいます。いわば社会の縮図。いろんな人と関わって共感したり問題解決したり喜んだり悔しがったり、たくさん体験ができます。今回の長い休校を経て、「学校という場のありがたさ」を痛感しました。勉強を教わるのは今どき動画を見たり、これからオンライン授業もできるようになりますが、「人との関わりのなかで心を育てること」は集団の中でしかできません。きっとこれから先生に望まれることは「素晴らしい授業をすること」だけでは



なくなりません。ICT教育が進み、各単元の授業は国や県が作成した動画を見る時代になり、先生は教室で理解しづらいことを補足したり演習問題で理解度をチェックする役割になるかもしれません。これからの先生は、子どもの心を掴んで勉強や活動をヤル気にさせる、子どもの気持ちに寄り添える先生であってほしいと思います。

先日、不登校支援として佐久市教育委員会が設置している「チャレンジ教室」を参観させていただきました。調理実習として枝豆をつぶして「ずんだ餅」を作っていましたが、先生方一人一人が温かな愛情と手厚い対応をされていて、いろんな事情で学校に行けない子どもたちが安心して人と関わりながら過ごせる大切な場所を作ってくださっていて、先生にも行政にも感謝の思いでいっぱいになりました。

また、学校に頑張っているけど、なかなか辛い子、辛いと言えない子、まだまだたくさんいると思います。そんな小さな声にも手を差し伸べられる仕組み作りも必要なのではないかと感じています。

「今だからこそできること」。コロナウィルス感染症をきっかけにやりかけたこと、必要だと気付いたことを、更に改善に努めていきたいと思っています。